

佐江衆一——闇の向うへ跳ぶ者は

新潮社

闇^{やみ}の向^むうへ跳^とぶ者^{もの}は

昭和四十八年九月十日 印刷
昭和四十八年九月十五日 発行

著者／佐江衆一^{さえしゅういち}

発行者／佐藤亮一

発行所／株式会社新潮社

東京都新宿区矢来町七十一

電話／東京(〇三)二六〇一一一

郵便番号／一六二

振替／東京八〇八

印刷所／株式会社金羊社

製本所／神田加藤製本

定価八〇〇円

乱入・落し本はお取替えしやう

© Shuei Sae Printed in Japan 1973



闇の向うへ跳ぶ者は

「おい、いつまでやれるんだ？」

あらたまつてそうきかれると、おれはいつも困ってしまうのだ。第一、あすのことを考えたことはなし、オトナを安心させるためにうそをつきたくはないからだ。せっかくゴキゲンな気分の仕事をしているんだからひとりにしておいてくれればいいのに、穴のふちにしゃがみこんだ家のおやじさんからしつこく質問されると、シャベルを投げだしてサヨナラもいわずにまたどこかへトコトコ歩きだしたくなってしまうじゃあないか。

ふかく掘った穴の底の黒砂にじくじく海水がしみだし、まるでヘドロみたいなおいだが、乾いた銀色の砂にふちどられた頭上の円形の青空は、きらきらとかがやく七月の朝の陽のひかりにみちて、カラッとしていた。おれが全身のちからをこめて投げあげる砂のかたまりが、さわやかに羽搏く^{はば}かもめみたい^だに真夏の青空へパッと消えてゆく。汗にぬれたおれの裸の上半身へ海辺の太陽ががんがん照りつけ、砂浜の放送塔からわめきだしたジャズがおれの頭のなかですごくシャープになりひびいている。

「よう、いつまでやれるんだい？」

おれは身輕に穴からとびだすと、そこに山とつまれていたゴミをせっせとかき落しはじめた。

腐りかけたスイカのかわや弁当のから、海水にぐちゃぐちゃぬれた新聞紙や包装紙、重油のべったりこびりついたビニール袋、サンオイルや合成洗剤のひしゃげたポリ容器、干からびた魚や歯をむいた猫なんかの死骸……手足のもぎとれた首と胴体だけの人形もあれば、砂にまみれてしわしわにちぢれたいやらしいゴムのサックもある。きのう一日の海水浴の大群衆が排泄していったきたねえゴミとよごれた海が運んできた漂流物の山だが、まあ、海の家のおやじさんのいうとおり砂浜に埋めてしまえば、朝のうちにくらはゴミの少ない熱い白砂のうえで日光浴がたのしめるつものだ。おれだって別にゴミをかたづけるのが好きってわけではないが、来る日も来る日もベルトコンベアーで運ばれてくる冷蔵庫のネジ止めばかりをさせられた大工場の臨時雇の仕事や、東京のパチンコ店やちっぽけな町工場で働いているよりも、太陽と海辺の風のなかでからだを精いっぱいうごかしているいまの方がはるかに気分がスカッとしているってわけ。もつとも、新宿の街にポケットと突っ立っているおれは、色刷りの美しいポスターのなかから親密なガールフレンドみたいに気分のいい笑顔をむけてきた水着姿のかわいいポインちゃんにさそわれて江の島行の電車に乗ってしまったのだし、太陽のカッカと照りつける海岸をゴキゲンに歩いていたらアルバイト募集の貼り紙を見つけたので軽い気持で声をかけてみたまでで、いつまで働こうなんて計画はぜんぜんないのだ。ところがさっきはウサン臭げにおれを見て、まあ一日働いてみてからだとか冷たいことをぬかした海の家のおやじが、すっかりおれを気にいつてしまったみたいだ。

「よお、いつまで働けるんだい？」

砂浜はもう大勢の海水浴客でこみはじめていた。海上にのぼった太陽が強烈に反射して海も砂浜もまぶしくかがやき、波の音がさわやかな爆発をくりかえし、浮輪をすっぽりと胴につけた子

供たちが敏捷なピグミー族みたいにヤスをふりまわしながら波のなかへ飛びこんでゆく。

「すぐにはやめませんよ」

とおれは少し考えてから答えた。あのポスターのカワイコちゃんよりもホンモノのコーヒー色に全身をやくには、いくらサンオイルやコーラをたっぷりすりこんで脳味噌が干あがるまで砂浜にぶっ倒れていたところで、一週間や十日はかかるだろう。リング上でくりかえし打ちのめされても、太陽の鮮烈なかがやきをその裸の肉体のすみずみから発散しながら微笑をたやさない黒人ボクサーみたいになりたいと願っていたのに、東京にきてから皮膚がすっかりなまっ白くなってしまったうえに、家にいたときと同じようになんだか酸素欠乏症みたいな息苦しい気分になっていたおれが、アルバイト料をいただいて黒人なみに肌を真黒にやくことができれば悪くない話だ。それに、真夏の太陽と海、ゆきずりの裸の大群衆のなかで一夏を過すのは、バッグンに健康的というものだ。最近よくいうじゃあない、人間、裸になろう、新鮮な空気を吸おう、自然にかえろうって。

「脱衣小屋に寝泊りしてほしいんだが、お前、持ちものはそれだけかい？」

海の家のおやじさんは、毛糸の腹まきへ両手をつつこんだまま、砂のうえに投げだしてあるおれの草色のよごれたショルダーバッグを見ていった。有楽町で買った米軍の中古品のショルダーバッグにぶちこんでおれが大切にもち歩いているものといえば、家出したときおやじから盗んできた旧陸軍のごつい双眼鏡と、コマーシャルが気にいって愛用している男性化粧品と旅行用の歯みがきセット、それに暇つぶしにばらばら見る漫画本が二、三冊。いい若い者が寝ぐらをかえて気ままに生きてゆくの、あとなが必要だといいたいんだ。しかしこんなことシブチンの老いばれに話したってわかっちゃもらえない。そこでおれは、こころやさしく微笑しながら、ジーパ

ソの尻ポケットから運転免許証をとりだして見せてやった。下町の自動車修理工場で働いていたときとったのだが、指名手配みたいな顔写真のよこに打たれているコンピューターの番号は、お役所に登録されているおれの唯一の身分証明ってわけだ。

「森内順か。幾つだ？」

明治生れの年寄りには、免許証に記されている生年月日からはわからないらしい。

「十九だよ。もうすぐ二十歳^{はたち}だけど」

「本籍は鹿児島だな」

「ああ、市内だ」

ほんとうは桜島の裏の方、シラス台地のつづく大隅半島のへんびな田舎町だが、説明するのがめんどうだからいつも市内だと答えることにしているのだ。市内の者はおれたちを島^{しま}者だなんて軽蔑しているが、おれたちの方でも桜島に近い地元の者を麓^{ふもと}の者とよび、市内の連中をよそ者として差別しているのだが。

「おやじとおふくろは鹿児島にいますよ」

とおれは先まわりしていった。おれには関係ないことだけど、両親が健在だと話すと、どの雇主の表情からも警戒心のしわが薄れてゆくからふしぎだ。とくにミカン栽培をしながら町の青少年運動の役員なんかも熱心にやっているおやじの肩書を話してやるときなんかには。

戦後、復員してきたおやじは、桜島と海のむこうに鹿児島^{鹿児島}の市街をのぞむ町はずれのシラス台地に、十年かかってミカン畠を独力でつくりあげた働き者だ。いまでも酒も煙草もやらない糞マジメなおやじどんが、市内のバーを手伝っていたという十二歳も年下のおふくろをどうくどいて嫁さんにむかえたのか知らないが、おやじがおれにスパルタ教育をほどこそうとけんめいだった

のにくらべて、おふくろは叱ったためしがなかった。おれが高校二年の秋、はじめて家出をしうとして、おやじの留守に折りたたみの雨傘まで用意してリュックサックとポストンバッグへ衣類や本などをつめているところへはいつてきたおふくろは、安香水のにおいをふりまきながらいったものだ。「あら、ジュンちゃん、そんなににおげさに荷物なんかしょっていったら、帰ってくるときに大変じゃなかのや？」一週間ほど友達の家を泊りあるいて、心細くなつて舞いもどつたときも、おやじにはものをもいわず殴りつけられ、市役所に勤めていた五歳ちがいの姉からは「お父ちゃんに恥かかせたね」と涙をこぼされたが、おふくろからは「あら、お帰り」と笑顔で軽くうけながされて、呆氣にとられてしまったのはおれの方だった。そのあとは、おれの教育方針をめぐつて、三人はすげえ顔しておきまりのいがみあいだ。おれは息苦しくつて家に帰ったことをすっかり後悔しちまった。おふくろだつて内心は狼狽していたくせに、チキシウ、こんどは絶対に家入りするものと固くここに決めたつてわけ。

「ふーん、じゃあお前もサツマ隼人というわけか。鹿児島男は肝っ玉がふとくて義理固いそうだが……」

とんでもない、おれはどちらかというとセンサイな方なのだ。海の家のおやじさんは一体おれの頭のなかになにを認めたというのだろう。いつだつて誤解されるのだ。もつとも、こんどは西郷どんみたいに思われたのだから、貧乏士族の末裔で鹿児島男子を任じているおやじにきかせたら大よろこびするだろうが。おれは孝行息子みたいな気分をチョッピリ味わうことができた。

「みなさん、主を信じましょう。シュウマツノトキが迫っています。世界はオダクにみち、人間のこころはすさみ、愛は失われました。いまこそ、主に救いを求めるときです」

またイカサマ宣教師どもの拡声器の声だ。竹竿のさきにくくりつけた拡声器を真黒な生首みたいにたかだかとかかげ、蓄電池とテープレコーダーを背中にくくりつけた裸の外人と、暑くい黒の長衣で手足をすっぽりくるんだ縁なし眼鏡のノッポの外人が、キリスト様さながらの神秘的な歩調で裸の大群衆に埋まる砂浜を歩きまわっている。砂の城をつくっている家族連れや、おへとポインの谷間まで太陽にさらして肌をやくことに専念している若い女たちや、抱きあっているカップルのまえでときどき立ち止るが、この世の終りという深刻悲惨な顔つきをしているのは二人の外人宣教師だけだ。

マスコミのヘリコプターが低空を飛びまわるし、放送塔からはビートのきいたジャズや甘ったるい旋律の歌がポリリウムいっぱいに絶えずながされているので、たとえ耳の神経を集中させたところで、片方の耳からはヘリコプターの騒音と裸の大群衆の叫喚、もう一方の耳からは人氣歌手のむずがゆい歌声がながれこみ、そのあいまにありがたいお説教のテープが波音にかきけされながらきれぎれにきこえてくるっていうお粗末だ。

へ好き好き好き……世界統一十字軍は……へあなたが好きよ……これまでいかなる宗教も解決できなかったクノウを説明して……へ好き好き好き……人生にキボウとユウキをあたえます……へでもひとりりでゆきたいの……あなたはセイギの種子をまき……へあの星のない夜……いまは主を求めるときです……へ熱い口づけ……主はすべての救いを……へもうなにもいわないで……雨のごとく降りそそぎ給われます……へあーあ、あなたが忘れられないの……アーメン……

おれは客から預った脱衣籠を籠番のアルバイト学生にわたすと、足のうらをこころよくがす熱い砂をふんで、ボート番をしている嫁さんの方へ歩いていった。

すっかり日やけしてバツグンに黒ぐるとなめされた、おれの顔、筋肉のもりあがった肩や胸、

いやらしいすね毛なんか一本も生えてないすなり伸びた脚へ、八月の強烈な太陽がしみとおつてくる。砂浜も海も裸の人間どもで今日も超満員だ。ハレンチな水着からサンオイルと汗の膜をぎらぎらひからせた肉体をさらけだしてごろごろ転がっている女たち、ギターを抱えている海水パンツの若者、砂にまみれて死んだ魚みたいに身うごきしない中年男、ステテコ姿の老いばれ、赤ん坊にミルクをのませている肥満体の女、金持、サラリーマン、学生、OL、工員、バーの女、掏摸、痴漢……ここではどんな人間も裸だ。太陽の熱と砂のムツとする照りかえしに海辺の喧噪がとけあつて、熱気全体が大音響のジャズみたいに、響きあい、煮えたぎつて、おれのすっかり日やけた皮膚をぶりぶりふるわせ、肉のおく骨のすいまでシビレさせてくれる。すばらしく切れるナイフのきつ先を近づけたら、触れるより先におれの肉体がおのずとはじけるみたいに裂けて、太陽のしたたりみたいな鮮血がふきだしてきらきらときらめくだろう。おれのからだから力強く噴出するもの。どこの誰とも知らぬ裸の他人たちへ感じる友情。おれはもともと太陽のしたで喧噪とゴミのなかから生れた黒んぼなのだ。

「ゴムボートは時間どおり返ってきますか？」

おれは貸ボート係の嫁さんへ殊勝に声をかけた。

「まだ十三番がもどらないのよ」

台のうえの旧式な置時計とノートをのぞきこむふりをして居眠りをしていた嫁さんは、答を用意していたみたいにしめつらをしてふりむいた。といっても、顔一面に白い日やけ止めクリームを厚くぬりたくり、色の濃いサングラスをかけ、麦わら帽子のほかにタオルで顔をかくしているの、わずかに露出している額によったみにくいたてじわと鼻の頭の汗、それから真赤な唇がゆがんで金歯がひかっただけだ。そのおおげさな完全武装は、涼しい帳場にがんばっている姑の

婆さんへの当てつけらしいが、おれがガキのころに夢中になった月光仮面の化け物みたいだ。

「また乗り逃げかな」

おれは同情の笑顔をつくろってから、いつも首からさげている双眼鏡をのぞきこんだ。

「見える？」

海水浴客のひしめいている海に、十三番のゴムボートは見つからなかった。

「さがしてきますよ」

「あとでいいわ。ここへお坐りなさいよ」

「そうしてもいられませんよ」

おれは忙しそうにいった。ボートをさがしにゆくという口実があれば、のんびり遊んでこられるので、おれたちはときどき嫁さんのところへ顔をだすのだ。

「ジュンちゃん、ここでちょっと番していてくれる？」

「いいですよ」

「トイレへゆくことだつてできないのよ」

嫁さんは台のしたからハンドバッグをとりだしたが、すぐに立とうとはしなかった。

「お婆ちゃんたら、さつきもここに来て、ノートを調べてお金をみんなもっていったわ。釣銭がないといつて客から千円でも二千円でも預れというのよ。欲の皮がつっぱってるんだから」

「若奥さんも大変ですね」

朝晩と食事のあとに必ず歯をみがくおれの真白い歯を、真珠みたいにきれいだとはめてくれたのはこの嫁さんなので、婆さんの悪口をきいてやるのはそのおかえしというわけだ。

水平線にガスがかかりはじめていたが、海も空も濃いブルーに照りかがやいて、最高の日曜日

だ。沖合を赤い旗をたてた巡視船がゆっくりと横ぎってゆく。くだけた波頭が白い泡の一直線になって、キヤーキヤー叫んでいる人びとに襲いかかりながらうちよせてくる。その波頭のもりあがる少し先のゆるやかにうねる海面に黄色いゴムボートを見つけたので、おれはまた双眼鏡をのぞきこんだ。

この双眼鏡はおやじが復員したときにもちかえたという星のマークのついた豪華版だ。がっしりと重くて、たぶん昔の勇ましい戦争映画に登場するナチの戦車隊長や日本の連合艦隊司令長官の使っていたシロモノにもおとらないと思うんだ。肉眼ではゴミつぶほどにも見えない遠い遠い世界が手のとどくすぐそこへあつと引きよせられて、おれが全世界の中心みたいな気分になっちゃう。焦点距離をあわせると、とびきり明るい円形のシャープな視界に青い海にうかぶ黄色い大型ゴムボートがとびこんできた。横っ腹に白ペンキで店の名前と番号が書かれているのでうちのボートだとすぐわかったが、さがしている十三番ではなかった。

小学生らしいガキがおもしろがってボートをゆすっている。かわいい水着をつけた女の子が泣きそをかきながら母親の首にしがみつく。母親は女の子をなだめながら腕白小僧を叱っているが、父親の方は胸毛のいやらしく生えたピンク色に日やけた胸を平手でペチャペチャたたきながら、両の目をとろんとさせちゃって、ごきげんにげらげら笑っている。二人の子供の目玉やら体格は父親似、顔の輪郭と小鼻のすわりぐあいなんかは母親似、両親と完璧な相似型で、ワイセツの見本みたいだ。自分たちの姿をショーウインドのなかにも飾ってみたら、いやらしいことをしっかり感じるさ。ふと、馬鹿笑っている男の顔をどこかで見たことがある気がした。

「煙草すう？」

と嫁さんがいった。

「おれ、すわないんです」

とおれは双眼鏡をのぞきこんだまゝいった。ゴムボートに乗っている男を、まえにいつどこで見たのか思いだせなかった。男はがっしりした骨格のからだで、頬骨のはった野暮天な顔だ。唇が厚く、少し出っ歯の前歯が煙草のやにょれてる。おしゃれには縁のないオトナ、おれの絶対に好きになれないタイプの人間だ。そう思ったとき、おれを執拗に小突きまわしながら白いヘルメットのしたから憎々しげに睨みすえていたポリ公の顔を思いだした。まだ東京にでたてで免許をとっていなかったころ、友達のをちよつとところがしたただけだったのに、おれを人間のクズだと罵倒して罰金をまきあげた中年の交通係のポリ公の顔だ。もつともおれは奴の鬼がわらみたいなつらなるべく見まいとしていたのだから、思いちがいかもしれないんだが。

男の子は調子にのつて立ちあがると、弾かれたように海へ飛びこんだ。反動でゴムボートが大きくゆれ、水しぶきが上がり、おれの視界の海いっぱいになぶしくきらめき、かわいい女の子の泣き笑いが大寫しになった。父親は怒鳴ったが、あいかわらず相好をだらしくくずして笑っている。

「ジュンちゃんは、お酒も飲まないし麻雀もやらないんだって？ どうして？」

嫁さんの声がすぐ耳もとでたずねた。

「別にどうってことないけど」

「未成年だから？」

どうだっていいではないか。

男は息子のを追って泳ぎはじめた。髪の毛のだいぶ薄くなった頭が、まるで切りとられた首だけがぶかぶか漂っているみたいに進んでゆく。先を逃げてゆく男の子の頭の形とそっくりだ。

そのガキの小さな頭がふいに沈んだ。父親は腕をのばして子供をだきよせ、肩にしがみついてしゃっくりの発作にでも襲われたみたいにあわてている息子を気づかって背中をたたいたり頭なんかをなでている。なんて甘っちょろい父親だろう。おれのおやじなんか、おれが海水を飲んで死ぬほど苦しもうと決して救いの手なんかさしのべなかったものだ。おかげで中学のとき県の遠泳大会で優勝したことがあるが、あのときおれは疲労こんばいして寒さにふるえながら、二度とおやじのために優勝するものかと決意を固めたのだ。

「ジュンちゃんて、すぐマジメなのね」

とまた嫁さんがいった。まだトイレにゆかないのだ。

「そう見えますか？」

「いまだき珍しいわ」

「まあ、体質かな」

「あ、そう」

あつさり肯定されてガックリだ。頑固で糞マジメなおやじの血をひいているからというわけではないんだ。中学のときからおやじにかくれて煙草はすっていたし、おふくろの相手をして酒を飲んだことがきつかけで量はいける方なのだから。

ことしの元日、大晦日の夜中から鎌倉まで友達とオートバイをとばしてきて、人並に八幡宮へ初詣なんかしたとき、願事などなかったから誓いでもたててやれと気まぐれをおこして、いやらしいオートナの真似はすまいと自分の憲法をつくってみたってわけ。はじめは抵抗を感じたが、断わるときなんとなく優越感めいたいい気分のわいてくることに気づいて持続しているのだ。煙草をすえば歯もよごれるし、肺ガンにだってなる。それに酒を飲むと肩をしっかり組みあって必ず

軍歌をがなりだすおとなを見るとヘドがでるほどイヤーナ気分になってしまふのはおればかりじゃないと思うんだけど。

銃口のさきの敵。白馬にまたがった神々しい天皇。戦火にやけただれた真紅の空。戦友のとうとい死……。酒は飲まないがおやじがおれをぶんなぐるときの気狂いじみた金色にひかる目は、いのちを賭けた大昔のはなばなしの幻をしつかり睨みすえている目だと思うんだ。おれたちにはたとえ大酒を飲んでアルコールの深い酔いのなかで絶叫してみたところで、友達と肩をたたきあい涙さえながしながら共に語りあえるどんな風景がひらけてくるだろう。ものわかりの悪い石頭のおやじのこと、逆にふがないほどもはやさしいおやじのこと。あるいはグチっぽいおふくろ、逆にチャラッとしたママハハみたいないやらしいおふくろ。話せば話すほどみんなチグハグだ。それでオトナどもが軍歌をうたいたすと、おれは打ちのめされたみたいにわびしくなり、いらいるのかも知れない。だけど、そんな偉そうなことや感傷的なことを口にする相手はシラケさせてしまうから、話に乗ったふりをして適当に言葉をにごしているってわけ。これでもその日を楽しくやりすごすために、人一倍気をつかっているんだ。

「貯金しているんでしょ、ジュンちゃんは」
嫁さんはますます誤解していった。

「できませんよ」

「なぜ？」

「稼ががわるいから」

これはオトナのいう月並なセリフかな。その答がまずかった。「ジュンちゃんは頭もいいのになぜ大学へいかないの」とか「そのからだならスポーツ選手にだってなれるのに、なぜならない